
薬師の妻 篠山香苗 2

桜乃花芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薬師の妻 篠山香苗 2

【Nコード】

N6040G

【作者名】

桜乃花芽

【あらすじ】

勘石との人生を選んだ香苗、果たして、名医と呼ばれる日がくるのか？

秀山先生が、香苗の嫁入り先を探す間、香苗の部屋の前には、先生の書生が見張りについた。

勘石が香苗の部屋に出入りするのを、監視するためだ。

当初、高山先生の長男を目論んでいたが、彼には既に、婚約者があったのだ。

香苗には、勘石がいると、安心していたこともあり、年の釣り合う相手はなかなかみつからなかった。

と言われたきり、そのまま、篠山家にとどまることを許されていた。

2

勘石は、香苗の顔が全く見られないわけではなかった。書生が食事をしている間、早紀が二人を部屋に呼んで話をさせてくれるからだ。

「勘介さん、どうすればいいの？私は、このままではお嫁に行かされてしまうわ」

香苗は、そんな泣き言を言う、とても可愛いと思った。

「香苗さん、幸せになるには時間がかかるんですよ、先生にも、私達にも。あせってはだめです。あなたの婚約が決まりかけたときが、機会だ。」

それまで大人しくしててくださいね」

勘石は、平然と見える割には、内心、余裕はなかった。

「香苗さん、私のお願いを覚えていますか？もしも、あなたの新しい婚約者が素晴らしい人で、その人を選びたいと思うなら、私の事は忘れて欲しい。そう言うものです。私は、二人共幸せになれないのは嫌なんです。でも、もしも、私を選んでくれるなら、二人で、必ず幸せになりましょう」

香苗は、二人で歩いていける喜びと、住み慣れた家と別れる寂しさで、泣き笑いのような顔をしている。そして、そのくしゃくしゃの顔で、大きく頷いた。

早紀は、ずっと、同じ部屋にいて、二人の話を聞いているが、決して、口を挟まなかった。

早紀は、まだ若く、理想に燃えていた、夫の事を思い出した。あの頃の自分たちの姿を見るような気分だ。

だから、この二人が不幸になるなんて、想像も出来なかった。

夫と自分が努力を重ねて、ここまで来たように、勘石と娘にも、きっと、いい人生が待っているに違いない。早紀はそう思うのだ。

夫だって、二人の幸せを願う為に、厳しい選択をしたにすぎない。

二人が、仲良く暮らしていけば、いつか、許される日が来る。早紀は、その日をかたく信じた。

「香苗さん、もうあなたの顔を見る事も、自由にはいかなくなるでしょう。婚約が決まった時、私を選んでくれるなら、緋色の牡丹の着物を着て庭を歩いて下さい。必ず迎えに行きますから」

香苗は、今すぐにもどこかに行きたいと言ったが、勘石は、一度は、先生に結婚の許しを乞いたいのだと言った。

「私は、いつ追い出されてもおかしくない立場です。でも、先生は私を追い出さない。なぜなのか、私は気がつきました。香苗さんとの婚約を許さないのも、篠山の名を譲らないとおっしゃるのも、全部私の為だ。私が、腕をだめにしても、なんとか、幸せに暮らして行けるように、私の身を軽くしようとしてくれているんですよ」

勘石は、少し辛そうに、下を向いた。

普段香苗に見せている表情とは違って、とても真剣な、男性的な表情だ。

「香苗さん、先生は、私の身を案じて、気を配って下さっているんです。でも、私は、その優しい先生を裏切ります。敢えて、一番辛くて、面倒な道を選びます。あなたを愛するから、私には、そういう道しか見えない、そういう道しか歩けそうもない……」

今度は、少し情けない顔をする。けれど、香苗には、誰よりも心強い、人生の道連れに見えた。

「勘介さん、大人しく待っているわ。あなたが見立ててくれた牡丹の着物を着て、待っているわ」

勘石は、香苗と話をした翌日、秀山先生に、香苗との結婚の許しを乞うた。

勿論、秀山は怒り、以後勘石は自室を出ることを禁じられた。香苗の部屋の前の見張りは、四六時中その場を離れなくなり、香苗もよほどの事がない限り、部屋からは出してもらえなくなった。

仏壇に上げるための百合の花を切りに、一度だけ庭にでたが、その時に勘介の目に入ったかどうかはわからなかった。

しかし、香苗の心には、無謀とも言えるような自信があつて、必ず、勘介が自分を見ていると確信できた。

最後に見た勘介の顔は、確か、少し情けない顔だった。なのに、どうして、私達は幸せになれると確信できるのだろうか？

勘石が、香苗との結婚の話申し出てから数日後、秀山は、駕籠に乗って出かけていった。

勘石はいよいよその時が来たことを知って、師でもあり、父親の役を努めてくれた、篠山秀山に、自分の心の中の正直な感謝の気持ちを書いた。

裏切るのだから、どう思われてもいいと、思うことはできなかった。先生が自分の重荷を軽くしようとしてくれたことには、涙を禁じ得なかったこと、それでも、医者として生きること、香苗さんとも生きることも、諦められなかったこと。

そして、いつか必ず、二人を許して欲しいと言うこと。

短い文章で、その上、筆も乱れている。

勘石は、廊下の書生に断りを入れて、飛脚を頼みに外に出た。

書生の一人が、勘石の後をついてくる。以前は、術刀の使い方を手を取って教えてやった学生だ。

申し訳なさそうに下を向いている。勘石は、前を向いたまま、その学生に話をした。

「木村君、嫌な仕事をさせてしまったね。けれど君は、心を乱さずに、精進しなさい。医者になることは、とても難しいことなんだ。いつも、自分の心の弱さと戦わなければいけない、そして、いつも優しい心でいなくてはならない。無我夢中で働いた後に、残る感情が、虚しさであることもある」

勘石は、久しぶりの青空の下を楽しむように空を見上げ、大きく息を吸った。

「それでもね、命に関わるということは、とても素晴らしいことだ。命を救えたときの、心の安らぎは、口で言うことは出来ないほどなんだ。そういう感覚が、私の心を支えているのだとおもう。医者と言うのは、新米でも、名医でも、命に対する責任は同じだ。そして、味わう喜びもおなじなんだ。厳しくても、目指す価値のある道だと思う。木村君、君はいい医者になってくれ」

話をしながらの、道のりは、長くはなかった。勘石は二日後に届くように飛脚を頼み、そのまま店をでた。

いつもなら、早紀と香苗の好きな菓子を買いに、もう少し、歩くのだが、今日はそのまま、帰途についた。

書生の顔も、勘石の顔も、それぞれに、清々しさにあふれていて、二人の関係が複雑なものだとは、誰も、想像出来なかった。

香苗の新しい婚約者が決まったのは、その日のうちだった。秀山の兄弟子の三男で、一度医者を目指したが、断念した人だった。今は、薬種問屋と医者を繋いで薬の商売をしていて、暮らしも慎ましいものではないらしい。

秀山は、すぐにも、話を決めなかったが、兄弟子に、兎に角一度娶せてからにしようと言われてしまった。

兄弟子は、勘石の事をよく知っていた。素行もよく、婚約を解消されるような者ではないのだ。

婚約が解消されたわけを、知るまでは、不安だった。それに、こんなに、急ぐのも、何かありそうだ。

秀山は、家に帰ると、早紀にだけ香苗の相手の詳しい素性をはなした。

「早紀、香苗にも、勘石にも、話ではならぬぞ。明後日、松野屋で娶せることになった。香苗もそういう席で馬鹿な真似はしないだろう」

早紀は夫から、その話をされても、一つも不安を感じなかった。仲睦まじい二人の姿が、心の中にいつもあって、それが崩れる想像などできないのだ。

二人に告げようかそれとも止めようか、迷った末に、早紀は、勘石にだけ話す事にした。香苗はやはり動揺するだろうし、香苗の身の

上に責任のあるのは勘石だからだ。

珍しく、勘石が外から帰って来た。書生が一人ついている。窮地にいるというのに、清々しい表情に見える。

勘石が日頃可愛いがっている学生だからかもしれない、彼らは、書生が共を務めているようにしかみえなかった。

早紀は帰った書生に勘石を呼ぶように告げた。

部屋に呼んで、そのことを話しても、勘石は、あわてることはなかった。秀山が出かけたときから、予想していたのかもしれない。

「早紀さま、私にそのことを話したことがもれたら大変だ、私はもう下がります。木村君は、若いけれど、こういうことを口外するような者ではありません、早紀さま、あなたから頂いた、ものを返すことは出来ませんが、私はこれから、私の後に続く若者達の標になるうと思えます」

「そうですか、あなたなら、いい師になれると思います。私は、あなたがこうやって、強く成長してくれたことで充分です。私にも、役に立つことができるって、嬉しかったものよ」

義理の親子は、優しい笑顔を交わそうとしたが、一筋の涙を禁じ得なかった。

「泣くつもりなどないのですが、どうしてでしょう？これでは香苗さんを任せてはもらえないな」

勘石は、今度は、にこりと笑顔になった。早紀も、笑顔で頷いた。

血の繋がりでない、もつと優しく暖かい絆がそこにあった。

香苗は、駕籠に乗せられたときから、きつと、こんな事だろうと思っていた。

松野屋という大きな料亭にその席は用意されていた。庭の見える美しい部屋だ、夏はもうすぐ過ぎて行くが、この庭にはまだ、夏の息吹きが残っていて、少し物悲しい。

香苗と早紀は隣の部屋で少し待たされた。先方にも事情はあるらしい。

先方の名前さえ香苗は知らなかった。

母親は知っているらしいが、意味ありげにあなたは、知らなくてもいいでしょう？と言った。

しばらくすると、先方が席に着いたららしい音が伝わって来た。

店の給仕をする女が、香苗と早紀に声をかける。

なんの緊張感もなく、香苗と早紀は隣の部屋の襖を開けた。

香苗は下を向いたまま、座布団の上に座った。先方は、父君が介添えをしているらしい。

香苗は、照れくさいとも思わなかった。相手の顔を見ないのは、お見合いが終わったあとに、意識する対象を持ちたくないからだ。

母は、決まり言葉を並べて挨拶をし、急なこの席に来てくれたことに頭を下げて礼を言った。

「香苗の顔はご存知ですか？学問所にもお薬を届ける事があるのでしよつ？」

母の言葉にびっくりして、香苗は、見るまいと思っていた相手の顔を、ちらりと覗き見た。

確かに、毎月、薬を届けに来る商人であった。それに、もしかすると、香苗よりも年が若いかもしれない。

香苗は、見合いの相手が、医者でないことよりも、その若さに驚いた。

彼の若さは、そのまま、父親の真剣さと、焦る心を表していた。

父親が、それほどまでに、勘石を排除しようとしていることに、香苗は、初めて、悲しさを覚えた。

目から、涙が落ちそうになるのを、くしゃみのせいにして、花紙にすわせた。

母は、すぐに気づいて、

「秋にもまた、鼻のくすぐったい時があるものですね」

と言った。

青年は、名前を名乗ると、やんわりと、断って欲しい本心を表した。

青年には、恋人がいるのか、それとも、見合いをしてまで、年上の嫁をもらう義理はないとおもつか。

「私の断りでは、父は納得しないかもしれませんが、でもご心配には及びませんよ、あなたと私に縁が無いならば、きっと望んでも一緒にはなれないでしょう?」

青年も彼の父も、少しびっくりして、顔を見合わせた。

しかし、香苗が気落ちした様子を見せないで、ひとまず安心した様子だった。

見合いの席は、思うよりも、和やかに過ぎて行った。

先方にも、自分と同じような事情があることで、双方とも相手に親しみを持ったからだ。

彼の父君は、漢方医で、香苗の父がお城のお勤めをしている時に、兄秀雅と香苗が体調を崩すと、診てくれる医者であった。

見合いの席もおわろうとするときに、香苗は青年の父君の顔を思い出したのだ。

香苗は子供の頃診てもらったことを思い出したのを、父君の目に伝えて、一礼した。誠実そうな父君は、嬉しそうににこりとして、本当にお綺麗になられたな、と言った。

青年は、どうして医者になるのを諦めたのだろうか?深い傷を負ったあとも、諦めようとしめない者もあるのに。

彼の学問所での評判を聞くと、彼の判断はとても正しいのだとわかる。

香苗は、そのわけを聞いてみたい気になっていた。

「折角ですから、一つ教えて頂けませんか？お嫌ならお答えはいいません。大変不躰ですが、あなたは、どうしてお父様の後をお継にならなかったのですか？」

早紀は、先方の顔を伺いながら、香苗をたしなめた。

「香苗、失礼が過ぎますよ！そう言うことは、二人ではなすことです。お見合いの席の話題ではありません」

青年は、当初よりもずっと打ち解けた表情で、ニコリとした。

「いいですよ。医者の家系の人を嫁にもらおうと言うのですから、当然です。医者にとつてはとても基本的なことなんです。私には、人様の命は重すぎるのです。私には、とても、患者の命の責任が負えそうもない。ならば、医者となった人達を助けたいと思ったんです」

青年の答えは、香苗の予想とは全く違っていた。香苗には、知識とか、技術とか、そう言う理由しか思い浮かばなかった。

香苗にも、診ている患者を亡くすことがあった。

そう言う時は、やはり、力の及ばないことに、がっかりするし、悲しいし、申し訳ないとも思う。

しかし、香苗は、いつも、懸命であり、治療も、その都度工夫しながらやって来た。

一度たりとも、そう言う重圧から、逃れたいと思ったことはなかった。

「そうですね。私には、思いもよらないお答えでした。でもお答えをきけてよかったです。ありがとうございます」

香苗は、嫌な席と断らすに、ここに来て良かったと心から思った。これで心おきなく、勘介の手をとることができる。

早紀は、相手の青年と娘の双方が、とてもいい顔で打ち解けているのを見て、娘の将来は、母である自分にも、予想出来ないくらい、明るさと、可能性に満ちている、そう感じずにいらなかった。

親だから、あるいは仕事を手ほどきした師だからと、子供や弟子のことを、わかつている気になる。

人はみなそうだ。心に愛があると、何もいわなくたって通じるし、親の心もわかつていてくれると思ひ込んでしまう。

でも、弟子も子供も、自分の人生を生きているのだ。

母や師の思い通りになどなるわけがない。

誰の罪でもないんだな、早紀ははっきりとそう感じていた。

「無理なお願いをして、悪かったですね。その上、娘の不躰な質問にもこたえてくださってありがとうございます。あなたには、良いことかもしれないから話しておきましょう。三日たっても私共から返事のないときは、安心して断りの手紙をよこして下さい夫はもう無理は言わないでしょうから」

早紀は、微笑みを浮かべながら、青年にそう告げた。早紀本人も、青年に、事情があるのをわかっていた。

青年の頭の良さや、話しをする時の、堂々とした態度は、本当に素晴らしいものだった。

夫が、娘の将来のために、必死に探し出した人だけがあると、早紀は思った。

勘石の事を深く理解していなかったら、早紀も、この青年を選んだかもしれない。

きっと、この青年を選んだとしても、香苗は、幸せになるだろう。心の傷はやがては癒えて、変わりに、絆ができる。誰の人生も、痛みと、再生を繰り返しているのだ。

しかし、青年がどんなに素晴らしい人であっても、娘の心には届かないのだろう。

娘は今恋をしていて、勘石以外の人の事は、全く見えていない。やがて、恋の持つ熱が冷めたとき、娘は後悔しないだろうか。早紀は、香苗の顔をみながら、最後にもう一度聞いてみたいと思った。

「香苗、この方は、貴方には勿体無いほど素晴らしい方だけれど、その方を、袖にしまって、後悔はないの？」

母の言うことは、厳しい意味をふくんでいる。しかし母の顔が少し紅潮していてまるで娘のようなので、香苗は、その厳しさよりも、母の愛を素直に感じる事が出来た。

「母さまは、何を考えていたの？ なんだか赤い顔をして、母さまの

お見合いのようだわ……」

話すうちに、香苗の目には涙が溢れた。

早紀は、香苗に心が伝わったことが嬉しかった。賢い子だが、まだまだ子供だと思っていた。

しかし、厳しい言い方も、わかってくれるようになってくれた。

「香苗：お前は……」早紀はそれ以上は言わずに、先方に詫びを言った。

しかし、先方は、婚約をするきも無いのに、ここに来たのだから、私たちも同罪だと言って、微笑んだ。

この青年も、香苗も一人立ちをして、歩いて行くんだなと思うと、少し寂しさを覚えた。

香苗の事を、聞いて来てやろうと、やくそくをした以上、なんとか言わないわけには行かない。

青山は、心を乱したまま、花との待ち合わせの書庫に向かった。

彼女は、友達を心配しているのだから、遅れたり、忘れたりするわけもなく、そこで待っていた。

青山は、彼女を美しいとも、魅力的だとも思っではないが、医者としての自分を支えてくれる助手として、雇いたいと思っている。

男の医者には、それぞれ家庭も、師との関わりもあって、少々面倒だ。

花には、そう言う面倒な関わりがなかった、しかも、青山に好意を持っている。

助手として雇うのには、花は申し分ない条件を持っている。だから余計に嫌われたくはなかった。

青山は、心を押し殺し、微笑みながら花に近づいた。

彼女が期待する答えは持っていない。

しかし、真実を告げないわけにはいかない。

青山は、心を静めながら、花に近づいた。

「鈴村さん、お待たせしたようですね。私は、どうお話しようかと、少々考えあぐねてしまった。香苗さんは、もうすっかり、元気でしたよ。しかし、勘石の怪我は相変わらずだね…」

青山は、もう少し、落ち着いた場所に行きたいと思い、花に提案して学問所をでた。

学問所から出て、東に少し行ったところに、座敷のある、甘味屋があった。

青山はそこしか思い浮かばなくて、まっすぐに、その座敷に上がった。

香苗のことを話しながら、並んで歩いて来たが、青山が店の奥に入ろうとすると、花は少し気が引けるらしい。

「鈴村さん、中に入れば気の引ける事はありませんよ、その通りに面したところが、格子になっているし、明るい部屋ですから」

青山が言う様なことを心配しているわけではなかった。

そうではなくて、花は、青山が親しげに接してくれることがつらいのだ。

彼のことがても好きだから。

青山が花のことを、同級の学生としかみていないことは、花には手に取るようにわかってしまう。

「こんな所しか知らなくて申し訳ない。さあ、座ってゆっくりとして下さい。今日は、実は、他の人には聞かれたくないこともあったものですから…」

花は、座敷にあがると、明るい部屋の様子に、わざと安心したふりをした。青山は、とても素直で優しい人だ。花が外を見て息をすうと吐くと、ようやっと、納得したように話をはじめた。

「鈴村さん、篠山さんの話の前に、少し別の話を聞いてもらいませんか？あなたの医者としての腕を信頼してのことです」

「岡村先生、なにか私にご用ですか？」

花は、青山の話の内容を予測することが出来なかった。

医者として、青山を助けると言っても、青山はもう立派な医者だし、なにをしてほしいと言っのだろうか？

「鈴村さん、あなたは、素晴らしい技術をお持ちだ。そしてわたしは、いまだに、人の血を見ることがつらくてならない」

青山はとても真剣な表情で話している。青山の目をみながら聞いている花は、少しいやな予感を感じた。

「鈴村さん、実は、わたくしの家の診療所で医者として働いてもらえないかと、ずっと思っていたのです」

花は、震えるような嫌な感じを覚えた。断らなければ、大変なことになる。

しかし、花がぼかんとしているのを見て、青山は詳しく話さねばと思っただけ、診療所のところから、自分の母親の事まで丁寧に話すのだった。

花が思っていた通りに、青山は、花の、手術の腕にしかきょうみがなかった。

「鈴村さん、もしもあなたに、医者になった後に勤める宛がなかったなら、わたくしのところで働いてもらえませんか？」

青山は、とても真剣だ、どうしてこんな時にも思っても、それは、青山にとっては不自然なことではない。

ずっと考えていたことなんだろう。いい考えだと思っただけという顔をしている。

花は、こういう時、自分の意志を相手に伝える事が苦手だ。

医者になる勉強をしてからは随分言える様になってきた。

それでも相手が自分と全くちがう事を考えている時には、とても難しいのだ。

私はあなたの事が好きなのです。そう言ってしまうたら、どんなにか楽だったろう。

しかし、花は、一番言っではいけないことばを言おうとしていた。

「鈴村さん、いかがです？給料は他よりも色を付けましょう。そしてできたら、私に手術を教えて欲しいのですよ。わたくしも、幾らかずつですが、手術にも慣れて来ました。もう少しだとおもっています。どうか力を貸してくれませんか？」

青山の近くにいると言うことは、決して楽なことではない。

彼はやがては、妻を娶り、子供を持つだろう。

その幸せな、家族の姿を、ただながめていられるものだろうか？

そんなことは無理だ。花は心の中で叫んだが、その声は、青山には届かない。

「鈴村さん、もしお嫌なら、おっしゃってくださいね。わたくしは、あまり堅い人間には見えないでしょうから、そんな家に住み込みは不安かもしれませんが、その辺は、母とも良く話して、あなたの納得いくようにいたします。どうか宜しくお願いいたします」

青山は、いい返事が貰えるものと信じているようだ。

花は、心の中に湧いて来る不安に潰されそうになりながら、敢えて微笑みながら返事をした。

「岡村先生、私などでいいのでしょうか？もっと適任のかたがいらっしゃるのではありませんか」

「鈴木さん、遠慮は入りません。あなたが適任だとわたくしは信じます。良い返事を待っています。もう身の振り方が決まっているのなら、諦めますから、そんな顔はしないで下さい」

青山の顔には、先ほどよりも、少し不安の色が増した。

とてもいい条件を示しているのに、花が返事を渋るからだ。

花は、いけないとわかっていながら、青山の不安を取り払いたくてたまらない思いにかられた。

早く断つてしまえという強い自分と、使用人でいいから、青山のそばにいたいと言う弱くてずるい自分のあいだで花はもがいていた。

そして、一番苦しい選択肢をえらんでしまった。

青山の優しい笑顔が陰ることに、たえられなかったからだ。

「母に聞いてから、お返事をお返事と思いましたが、私も、もうすぐ卒業する身ですから、自分で決めます。もし、私がお役に立てるなら、喜んでお力になりたいです」

花は、笑顔を作り、そう言ってしまった。

「ありがとうございます。受けて頂けるのですね。嬉しいですよ、あなたは、素晴らしい医者だ。高い技術をもちながら、優しい心を忘れていない。わたくしは、あなたに見てもらったら、手術も、習得出来ると思えます。今度、実家に帰ったら、確かなことを決めて来ましょう。安心して待っていて下さい」

青山は、自分の事を話し終えると、お汁粉でも食べましょうと提案した。

どうやら、香苗と勘石の身に、何かがあったのだ。話したくないことがありありとうかがえる。

花が、大人しく待っていると、青山は、そろそろ話しはじめた。

「実は、香苗さんも、勘石も、ここには戻らないことになってしまいました。驚かないくださいね、あなたの所にも、落ち着いたら、手紙をと勘石が言っていましたから…」

とうとう青山は、酒を頼み、それをあおるように飲んで、話しを続けた。

「篠山先生は、利き腕を悪くした勘石の身を案じて、表舞台から引かせようとしたのです。しかし、二人は、もうどうやら、他人ではない。二人で生きて行くと、心に決めているようでした。当然、先生は、勘石の身を謹慎としました。そして、香苗さんには、新しい婚約者を探しました」

青山は、話にくそうにそれでも、言葉を選びながら、話してくれた。要するに、二人の父親に当たるひとが、許しをくれないから、駆け落ちをしると励まして来たと言うことらしい。

「あの勘石先生が、駆け落ちを…」

花は、少し赤い顔をして、下を向いた。

「鈴木さん、心配入りませんよ、篠山先生も、勘石に負担をかけたくないだけなのです。追っ手が掛かるようなことはないでしょうから」

「それでも、大切なご友人が居なくなるのは寂しいことですね」

青山の優しい言葉に、花は幸せな気分になる、花の事が心にあるわけではないのはわかっていても、嬉しくなってしまう。そばにいられるのは、やはり嬉しいことだった。

それから、ひと月ほどたった頃、香苗から、一つの荷がとどいた。添えられていた手紙の文字がとても美しいので、花は、とても安心した。

香苗の手紙からは、今の生活が、裕福ではないことや、勘石先生が、寺子屋の先生もかねていること、そして、先生の手が今はあまり動かないことなど、包み隠さない香苗の心が書かれていた。

花は、すぐに返事を書いた。香苗からの手紙が、丁寧で、美しい文字で書かれていたのにたいして、花の返事は、とてもまとまりがないものになった。

青山とのが気がかりで、学問所での暮らしも、もうすぐ卒業できそうなことも書けずに終わってしまった。

そして、とうとう青山とのことも書けずに終わった。

どうにか書けたのは、先生の手の怪我の全快を祈っていることと、またいつか、会える日を楽しみにしているとうことだけだった。

花の心は、青山と約束を交わした日から、ざわざわと騒いだままだ

った。どうしてあんな約束をしてしまったのだろう。

後悔をしたところで、青山に断りの手紙を出せる勇氣は花にはない。ただ、青山がいつまでも、独り身でいてくれることを祈るしか、自分を慰める道を見いだせなかった。

花は、下を向いてはいるものの、決して不機嫌ではなさそうだ。

勘石は、自室の窓の歪んだガラスを通して、香苗の姿を見ていた。

香苗をもしも、この家から連れ出す機会があるとすれば、明日の明け方をおいてないだろう。香苗は上手くやってくれるだろうか？

勘石は、自分が香苗に振られるなどとはもう思えなかった。

自信があるのではなく、別れの想像が出来なくなったのだ。

別れを想像すると、辛くてたまらない、以前のような心の余裕はもう勘石の中にはなかった。

香苗の目の中に、自分がいることを早く確かめたい。

勘石はそんなことを考えている。

しかし、そう言う自分の弱さを嫌いではなかった。

今までは、傷ついても、その傷の痛みさえ感じてはいなかった。

肉親を失った勘石は、子供ながら弱さは、悪いもののだと理解した。

傷ついても、何もなかったふりをすれば、弱い者には見えないはずだと思いきもつとしていた。

弱さこそ、勇気を生んでくれる感情であるのに、そんなことには、目を向けることもなかった。

香苗が勘石に与えてくれたものは、人らしい感情なのだ。苦しみも、目を交わす相手があるだけで、喜びにかわる。

だから、もう香苗を失いたくない。この暖かい、関わりを、無にしたいわけではない。

勘石は、これからしようとしていることが、いろいろな人を傷つけることはわかっている。

しかし、人を傷つける罪悪感よりも、香苗と生きて行ける喜びのほうが、大きかった。

秀山先生が、本当は、勘石に気を配って香苗との人生を諦めさせようとしていることを考えると、勘石は、自分の罪深さに、涙が出そうになる。

心を配ってくれたのに、それを裏切ったら、きっと、先生は、悲しむだろう。

勘石は、敬愛する先生に、裏切り者と思われるのが悲しかった。わかって欲しいと何度も思ったが、父親である先生には、勘石のことだけを考える事は出来ない。

香苗の婿としての、重い責任をはたすには、勘石の怪我は致命的だ。

先生はそう考えた。

努力を重ねた末に辛い選択をさせるよりは、今二人の仲を割いたほうがいい、先生はそう考えている。

しかし、今勘石を守っているのは、幼い頃に先生が授けてくれた、大切な感情だ。

それは、ただ一人で生きて行けるだけの強い心であり、秀仙との友情だった。

勘石は、暖かい情でつながっていた幼い頃の事を思い出すうちに、先生を裏切ったとしても、切れないつながりが、あることに気がついた。先生は、秀仙も、勘石も、愛してくれていた。確かにそうだった。

ただ立場が違うことも、教えられた。

今勘石は、冷たい扱いを受けているけれど、それは、先生らしい愛だった。

はつきりと気がつくと、勘石は乗り越えるべき、壁の大きさに、身を震わせた。

それでも、欲しいのかと聞かれている気がした。今、家の中に、秀仙がいないことも、すべてが、あてられた舞台のように感じられる。

感傷的な気分にはまっている暇は、あまりない。
どうにかして、香苗と話す機会を作りたかった。

香苗には、秀山先生を安心させてもらわなければならないのだ。彼女にとってはとても辛いことだろうと思われたけれど、父親との別れは、本来そう言うものだ。

とてもつらくて、孤独な闘いが強いられる。

最後まで、勘石のことを信じて待ってくれるだろうか？

一度でも、香苗と話しをする事が出来たとしたら、安心させて上げられるのに。

勘石は、胸の痛みにたえながら、何か香苗と連絡をとる方法がないかと、必死で考えた。

早紀の顔が浮かぶけれど、今回はかりはこの部屋から出させてはもらえそうもない。

考えてあぐねていると、部屋のドアが開いた。

書生が立っている。

勘石のよく知っている書生の木村君は、

「今秀山先生は、急患を診ていらっしやいます。子供が、うでに、おおきな怪我をしたので、今縫っているところです。奥様がお呼びですよ」

勘石は、一緒に香苗もいると期待して、早紀の部屋のドアを叩いたが、彼女はそこにはいなかった。

「勘石、右手の痛みはどうですか？香苗のお見合いの相手はあなたもよく知っている人でした。加藤高賢先生の御三男の高吉さんです。学問所にも、よく出入りしているそうですねとても人柄の良い、優しい方でした」

勘石の心に不安が渦巻いた。早紀の顔が硬かったからだ。

想像したとおりに、早紀は、勘石に娘を託す不安を口にした。

「早紀さま、私のしてきたことは、早紀さまの目には映らないのですか？私は、わが心しか捧げるものを持ちません。しかしいつか、成して見せましょう。この心で必ず幸せをかちとることができはります」

「高吉さんは優しくして賢い方、勘石は強くて、情が熱いかた、私は香苗がどちらを選んででも幸せになれると思うのよ。だから、選択は娘に任せます。勘石、家の子になってくれてありがとう。秀仙が一人前になれたのは、あなたのおかげだわ、もしも離れて暮らしても、私はずっとあなたの親だから…」

二人の目からは、涙が自然に溢れた。もう言葉にはならない。

「香苗は、あなたを待っているわ、あなたしか見えないの、わがままな子ではないけれど、あなたのことになると、あつくなる、どうか、優しくしてやって…」

勘石は、責任の重さに、身がふるえた、香苗の出した答えは、香苗から聞けと言うことだ。

香苗が、どんな顔でなんと言っのか、とても楽しみで、少し怖い。

勘石は、彼自身の心の中にあつた、一つの大切な夢のようなものをかなえようと思う。

香苗を、今のまま、明るくて、気の強い女子のまま、暮らさせてやること。

そして、一人前の医者に育ててやることだ。

もしも叶えられたなら、二人とも幸せを感じるだろう。

裕福な暮らしも、名家の娘と言う肩書きも、奪ってしまう代わりに、香苗の夢だけはかなえてやろうと思う。そう心にきめると、勘石の心は少し軽くなった。

何かを捧げなければ手に入らないもの、勘石は、今そう言ものを手にしようとしている。人生にとって、とても大切なものだ。

それは、香苗を手にいれるということではなくて、一人の男として生きて行くための気迫のようなものだ。

いつか勘石が見立ててやった、牡丹の柄の着物を彼女は、今日も着ていた。

季節はずれなのに、勘石には、とても美しく映る。

香苗を連れ出すのだと決めてしまうと、勘石は、とても落ち着いた気分になった。

そして、少ない着替えや、わずかな蓄えを一つの小さな行李にまとめて、身支度を整えた。

大きな家からも、暖かい食事からも離れて、得るものは、懐に入れた猫の子のように暖かく小さな幸せだ。

勘石の手には、揮発性の麻薬が握られていた、怪我の痛みをとるための、弱い眠り薬だ。

それでも嗅がされれば、少しの間眠ってしまう。

後に残る薬ではなかった。もっと強い薬もあるが、それは使いたくないと思っていた。

夜の帳がおりて、月が東の空に沈みはじめるところ、秀山先生が帰ってきたらしい物音がした。

今日は、大きな手術があった。しかも、勘石が助手を勤められないので、先生はおそらく、とても疲れている。

明日は、昼位まで眠っているはずだ。

勘石は、荷を背負うと自分の口と鼻を濡れた手ぬぐいでふさいで、薬瓶を持った。

そして、ドアの隙間に少し薬をたらし待っていると、見張りの書生が座りこむ音が聞こえて来た。

ゆっくりとドアを開けると、朦朧とした書生が勘石を見上げている。

木村君ではない。勘石は、申し訳ないといい、彼の口に薬を含ませた布を押し当てた。

彼の体を勘石の部屋の中に、引きずり込んで、香苗の部屋に向かう。勘石の住んでいる西の棟の反対側、東の棟の奥の部屋が目指す香苗の部屋である。

二階に向かう階段の上に先生の部屋がある。勘石は涙の浮かぶ目で見上げると、深く頭を下げた。

親とも思う先生への別れの挨拶だった。

そして、足音を忍ばせて、香苗の部屋を目指す。早紀の部屋を通り過ぎ、少し左に曲がった先に香苗の部屋がある。

勘石は、薬を布にしめらすと、曲がり角の手前に置いて、扇子で風を送った。

木村君がそこにいるのなら、少し気が引ける、あれほど、可愛がっていたのに。こんな仕打ちをしなくてはならないなんて…

しばらくすると、がさりと、ひとが崩れ落ちる音がした。

木村君が怪我でもしてはと思い、勘石は飛び出して行った。

彼は、口に布を当てたまま、寝た振りをしている。香苗の部屋のドアの前に勘石あての手紙が置いてある。

勘石は、急いでいるにもかかわらず、その手紙に目を通した。

勘石は、彼にとっての師であったと、その手紙にはかいてある。また涙が湧いてくる。

見てみると、木村君の閉じられた瞼にも、涙が滲んでいる。

ありがとう。勘石は、横たわる木村君にそう声をかけると、香苗の部屋のドアの鍵を開けた。

香苗を驚かさないように、ゆっくりと鍵をまわしたが、カチャリと言う音は、静けさの中に、大きく響いた。

ゆっくりとドアを開けると、香苗は寝台の上に起き上がっていた。彼女の瞳の色は、何が起きたのか？という表情から、愛しい恋人を見つめる目が変わった。

「勘介さん、やっと迎えに来てくれたのね」

香苗は、静かに寝台から降りて、勘石の胸に抱きついた。

勘石は、香苗を抱きしめて、静かに話し始めた。

「香苗さん、私は、この心しか捧げるものを持ちません。もしも、それでよいと言うのなら、私の妻となって、私の人生の支えになって下さい」

香苗はしばらく、そのまま動かなかった。そして、勘石の目を見つめて、にこりと笑った。

「勘介さん、私はわがままよ、きっと貧乏はイヤだと言っわ。それでも、あなたの奥にしてくれるの？」

「きつと、貧乏にはならないですよ。仮にも私は医者なんですから、早く、はいと、返事をしてください、そうじゃないと、先生が起きてしまうよ」

「わかったわ、勘介となら、私は生きて行ける。どこでも、何をしても、あなたの目の中に、わたしの楽しみがあるの」

勘石は、堪えきれずに、香苗と唇を重ねた。

今腕の中にいるのは、愛しい恋人ではなくて、初々しい妻だった。

「香苗さん、行こう。夜が明ける前に、鎌倉まで行きたい。そこからは、五差路だから、探す方も骨が折れるだろうからね」

「はい、今すぐ着替えるわ、そこに掛けて待っていて」

香苗は素早く、着物に着替え、袴をつけて、用意してあったらしい小さな荷を押し入れから取り出した。

そして、引き出しから、先生と早紀さまあての手紙をだして、文机の上に置いた。

「勘介さん、一つだけ約束してね、いつか必ず帰ってくるって」

「私も、そのつもりなんですよ。いつか必ず、親不孝を詫びに帰って来ましょう。手紙には、何を書いたんですか？」

「知りたいの？でもあなたには内緒よ、母さまと父さまにしか通じない話なの、いつか帰って来ることが出来たら、その時お話するわ」

手紙に何が書かれているのか、香苗は話してはくれなかったが、いつもと同じ笑顔で、見つめる目に、勘石は不安を感じることはなかった。

香苗の部屋で寝てしまった木村君の上に布団を掛けてやった。

そして、緊張に冷えた手を取りあい、二人は、新たな世界への一歩を踏み出した。

香苗は、早紀さまの部屋の前を通り過ぎる時、少しだけ、下を向いた。勘石が香苗を見ると、なんでもないと云うふうに笑顔で首を振った。

二人の道行きは、勘石の想像したよりもずっと楽しいものになった。

人に聞かれると、二人とも医者であり、長崎に蘭学を学びに行く、婚約者同士だと説明した。

二人は、旅先の人々に受け入れられた。話の内容は偽りでも、二人の心は真だったからだ。

長崎への旅を選んだのは、有名を馳せた女医がいたからだ。

香苗の良い刺激になる。勘石に秀仙がいたように、香苗にも目標とする、手本が必要だと勘石は考えた。学問所に花という素晴らしいライバルが居たように。

二人が家を出た時、秀仙は、妻チヨの実家に泊まり込んでいた。チヨはなかなか産気付かなかった。

秀仙は、チヨの顔色が悪くなり始めた事が気がかりで、今日は隣に床を取った。

チヨの父親は文句を言ったが、秀仙は、頑として、チヨのそばを離れなかった。

チヨは痛みを訴えてはいない、チヨではなくて子供に何かが起きようとしているのだ。

「チヨ、産気が弱いのはよくあることさ。これから、産気を強める薬を渡すから、飲んでくれ念のため木村君に飛脚を飛ばした、彼が見舞いに来たら、手伝ってもらおう。いつも君に手伝ってもらうように、やり方は知っているだろう?」

秀仙はチヨにはそう言ったが、実際は、直ぐにでも、手術を始めたかった。痛みが始まったら子供があぶない。

「あなた、なんだか恥ずかしいわ、これからもずっと顔を合わせる人なのに」

「木村君は医者だ、君が恥ずかしがるような態度はとらないさ」

チヨは少しうつらうつらとしている。腎臓が弱っているのかもしれない。

まもなく、木村君は到着した。足りない器具も持って来てくれた。

木村君は、何かいいたげだったが、チヨの容態は、急をようしたの

で、二人は、直ぐに手術の準備にかかった。

香苗と勘石が家をでてから、二日後の話だった。

チヨは、脈もしっかりとしているし、呼吸も安定している。

心配なのは子供の容態だった。

「チヨ、さあこの薬を飲んで。少し眠くなるかもしれないが、起きて欲しい時は起こすから寝ていてもいい」

チヨが眠ってしまつと、秀仙はすぐに術刀を握った。

出血が心配だったが、オランダで作られた止血剤がチヨにはよく効いた。

もうすぐ、子宮が見えてくる。秀仙は、はじめて、冷静でいられないほどの、恐怖を感じた。

手が震えるし、考えがまとまらない。

木村君が汗を押さえてくれている。

神さま、と心のなかで叫んだ。たくさんの布を用意し子宮にはさみをいれる。

羊水が流れ出て、子供の手が見えた。とりあげるが、思った通りに、紫色の赤ん坊は鳴き声をあげなかった。

へその緒を切ると、秀仙は、子宮の縫合を木村君に任せ、子供の蘇

生に取りかかった。

生きてくれ生きてくれと何度も願いながら、子供のからだを温める。鼻と口から羊水を吸い出し、逆さにして背を叩く肺の中にも水が入ってしまったていたらしく、口から羊水が出てきた。

暖かい湯たんぽのうえに手足を乗せて冷えないようにして、心臓を刺激する、合間に、口から空気を吹き込んだ。

秀仙は、子供の肌の色が少しずつ、自分と同じ色に近づいて来たことにも、全く気づいていなかった。

たのむたのむ、どうか助けて下さい！秀仙の心の中にはそんな叫びがあった。

木村君は、子供が息を吹き返したことに気づいていたが、秀仙がなきながら、救命を続けているので、そのまま、チヨの手術を続けた。

もう駄目なのか、秀仙の心には、不吉な予感がおきはじめる。

それでも、諦めがつかない。嗚咽に喘ぎながら、救命を続ける。

子供の鼻をつまんで口から息を吹き込もうとするが秀仙の呼吸が乱れていて、なかなか、出来なかった。

すると、子供の手が鼻をつまんでいる秀仙の手をどけようと動いた。

秀仙は、その時、はじめて、子供が女の子であること、すでに肌からは、酸素が欠乏している印が消えていることに気がついた。

秀仙は、子供を抱き上げると、ぴしゃりと尻を叩いた。

赤ん坊は、今度は、火の付いたように産声を上げた。

木村君は、子宮の縫合を終え、筋肉の縫合に入った。

赤ん坊の泣き声が響き渡ったわけだから、もうすぐ、父上母上が覗きにくるはずだ。

いきなりこの状況を見せたら、なんと思っただろうか？

自然分娩ではないことは、一目瞭然だし、なんと言っても、一言の相談もしていないことに怒り狂うのだろう。

木村君は、秀仙の考えが通じているように、手早く、縫合を終えて、手術や分娩で血に汚れた布団をかたずけたりしてくれている。

秀仙は、いろいろなことを考えなくてはいけない状況だったが、まだ涙が止まっただけでなく、考えもまとめられない。

赤ん坊に産着を着せてやりたいと思っても、どこに置いてあるのかわからない、生まれたばかりの娘は、血にまみれた布にくるまれたままだ。

「チヨさま、御気分はどうですか？」

目覚めているわけもない、チヨに木村君は話しかけている。

「産声が、聞こえました。また男の子ですか？」

チヨは、目覚めているはずはない、しかし、確かに木村君の問いかけに答えている。

「木村さん、奥の箆笥の一番上の引き出しに、産着が入れてある…」
チヨはまたうつらうつらと眠り始めた。痛みを止めておくために、またすいくちから麻の葉の薬を飲ませた。

木村君は、すぐに産着を探して秀仙に渡した。

強い麻酔薬が体の中に、流れていて、チヨは、話など出来る訳はないのに、娘の産声を聞いたと言っていた。

命に関わる仕事をしていると、常識では解決出来ない事例に出会う事がある。

今チヨの意識が一瞬戻ったのも、その一つだ、秀仙が、産着を着せてやりたいと思う気持ちをくむように、彼女は、産着の有るところを教えてくれた。

息を吹き返した娘は、一度死にかけたことは、今は、もうなかった事のように、すうすうと寝息を立てて眠っている。

気持ちが少し落ち着いて来ると、外が騒がしい事に気が付いた。

産声に気が付いたチヨの実家の人々が、つつかい棒をはずせと騒ぐのだ。

「秀仙先生、開けてあげましょう。可愛いらしいお嬢様をご覧にな

「つたら、誰も、何も言えないはずですよ」

「そうだね、と呟くように、秀仙は言った。

「つつかい棒をはずすと、チヨの実家の家族たちは、飛び込むように、雪崩れ込んで来た。」

「さつきから戸を叩いていたのに、何を隠そうと言うのかね、君はそう言つて来る義理の父親に、秀仙は、すぐに、娘を抱かせてしまった。」

「私の娘ですよ、死にかけていたんです。相談したら、手術はさせて貰えないと思って、勝手にチヨの腹から出してしまいました。どちらにも元気です。チヨは、腹の傷が癒えるまで少し時間がかかりますが、娘は元気な産声だったでしょう？」

父上は、しきりに文句を言おうとするが、娘が手をうごかしたり、泣き出しそうな顔をしたりするので、どうしたって、笑顔になった。

そして、一番後ろの方から、この家の生活に、退屈し始めた長男の太郎が溢れんばかりの笑顔で入って来ると、秀仙の勝ちが決まった。

「父さま弟が生まれたの？」

「太郎は、弟が良かったのか？産まれたのは可愛らしい妹だ、可愛がってやるんだよ」

「太郎、大人しくしていい子だったな。母さまの体が治るまで

もう少し、我慢するんだぞ」

太郎は、元気に頷くと、今度はチヨの近くによって行った。呼びかけるが、チヨは、すうすうと気持ち良さそうに眠っている。

「母さま、いつ起きるの？」

「そうだな、あしたの夜くらいになれば、目が覚めるだろう、母さまは、お腹に傷があるんだ、だから、母さまの体に触ってはいけないよ」

太郎は、にこりとして頷くと、今度は、新しい兄弟の顔を覗き込んだ。

「父さま、これが妹なの、ちっとも可愛くないよ」

「ははは、まだ生まれたばかりで、顔がクシャクシャなんだ太郎も生まれたばかりの頃は、こんな顔だったんだよ」

太郎は、そんなの嘘だよ、と言ってはしゃいでいる。妹が産まれてきたことが、嬉しくてならないらしい。

太郎がいるお陰で、場が和んで、秀仙は責められることもなく、受け入れられていた。

しかし、まだまだ、互いが理解を深めるには、時間がかかることになった。

香苗は、父への手紙の中に、あることを書いて来た。娘として、一人の医師として、書いてはいけないことだった。

香苗は、二人に追っ手が差し向けられた時には、母さまから預けられた懐剣で、命を絶ちます。そう書いたのだ。

医者として患者の命をまもる。妻として、夫を支える。

そう言う人生を送りたいと思っている人間が、書いていい文章ではなかった。しかし、香苗は、敢えて書いたのだ。

本当に死ぬ気などない、しかし、他に香苗は、自分の心を伝える言葉を思いつかなかった。

もっと深く、考えればよかったのだし、母さまの懐剣を抜いてみれば良かった。

人の命に関わる仕事に携わってきた家の、その家族の心を守るために誰かが思いついた事なのだろう。

父も母も、懐剣の秘密を知っている。その上で、香苗にたくしたのだ。

だとしたら、香苗が勘介を選ぶことも、きっと分かっている上でのことだ。

両親の本当の心を理解したとき、香苗は、自分の書いた手紙の罪深さに、涙を流した。

長崎への道のりは、長かった。

薬問屋のある町では、医者のお客が効いたから、少しは、稼ぐ事が出来た。しかし、江戸からはなれると、医者として働く事は難しくなった。

このまま旅を続けても、幸せからは、遠ざかってしまう。

勘石は、遠州まで来たところで、香苗に一つの提案をした。

「香苗、このまま旅を続けるのは、辛い。旅人では医者として働くことも出来ないし、寺小屋で、子供の世話をすることも出来ない」

香苗は、明るくしているが、最近何かあったのか、元気がない。

「少しこの土地で暮らさないか？幸い漁師町だから、医者として役にたてることも多いだろう、人と仲良く暮らして、少し、楽しみをもとう」

「勘介さん、私が元気がないのは、この懐剣のせいよ。旅のせいじゃないわ。でも、あなたがそう決めたのなら、そうしましょう。あなたのその包帯ももうすぐとれるのだし、私も手紙をかきたいと思っていたの」

「そうしよう。お寺の住職さんにはもう話をしてあるんだ。その胸の懐剣がどうかしたのか？」

香苗は、ずっと、勘介に話たいと思っていたが、やはり、死んでやると手紙に書いてしまったことを知られるのが嫌であった。

「言うてごらん、話せば、君の考えとは違う答えが見つかるかも知

れない、私は、親を亡くしたとき、まさか医者になれるなんて思わなかったよ、君の家にひきとられた時も、君の婚約者選ばれた時も、私は、なりたいて言っただんだ」

「そう言ったって、普通は許されるわけもないけど、君の兄さんは、あんまり、やる気の表に出る人じゃなくて、私が来たことではじめて、真剣さが、先生に通じたらしい。もとから、やる気はあったんだけれど、私のように口に出して騒ぐほうじゃなかったんだ」

「私は秀仙の役に立てて嬉しかった。そして、医者勉強が出来て、君のことを好きになって、ずっと、幸せだったよ」

香苗は、勘介の言う意味は分かるものの、深い後悔の念にとらわれて、素直にはなれなかった。

勘石は、何も言わずに、香苗の胸に差ししてある懐剣を取り上げた。

「香苗、この懐剣が原因だと言ったね、君の身を守る為の物、私が見ても構わないだろう？」

香苗は、決心したように、勘石を見つめた。

そして、しずかに話をはじめた。

「その懐剣を見る前に、話を聞いて、私は、あなたと幸せに暮らしたいと願って、両親に手紙を残してきたの。とんでもない内容の、情けない手紙…」

「追って来たら、死ぬとでも書いたのかい？香苗、きっと、先生も

早紀さまも、覚悟していたさ、君がその言葉を使うことを、親つていうのは、すべて分かっていているものだよ。だから、そんなに悲しそうな顔をしなくていい」

「でも、この懐剣は…」

勘石は、錦の化粧袋から懐剣を取り出し、そして一息に鞘から引き抜いた。

剣は、細い桐の木で作られていた。木刀ではあったが、よく磨かれ、艶がうまれている。

そして、鯉口の近くに何か文字が彫り込まれていた。

「命は守るもの」

そう読む事が出来る。

「手紙を書いたときには、深い考えを持ってはいなかったの、医者になることの厳しさも、分かっていなかった。恥ずかしいわ」

香苗は、ずっと悩んでいたのだろう、とてもつらそうだった。

「香苗、君が、何かに悩んでいるのを、気づいていながら、今まで助けてやらなくて、悪かった」

勘石は、泣き出しそうな香苗の目を見ながら、優しく話を続けた。

「君が、そんなことを書いたのだから、私が情けない態度しかとれ

ないからだ。君が悪いわけじゃない。お二人は、私達を見守ってくれているんだ。それはわかるだろう？」

香苗は涙をこぼしたが、ずっと元気が出てきたようだ。

「誰の言葉なんだろうね？すごくいい言葉だ。私達は、そう言う厳しい世界で生きていこうとしているんだね」

香苗は、勘石の胸で甘えながら、流れる涙をその胸に吸わせた。

「母さまは、悲しんではいなかしら？父さまをがっかりさせてはいなかしら？」

「香苗、私達もいつか親になるだろう？今は自分たちのことで、精一杯だけれど、親になったら、きつと、もつといるなことが見えるのさ。子供が何を考えているのかも、何を望んでいるのかも。御夫妻も、分かってくれている。今君が残して行った手紙のことで悩んでいることもね。だから、必ず幸せになろう」

「私達が幸せに暮らすことが恩を返すことだと思っただ」

「ここでしばらく暮らして、路銀を蓄えよう。長崎は遠いけれど、私達はまだこんなに若い」

勘石は、香苗を優しく抱きながら、自分も香苗の小さくて柔らかい体に甘えていた。

「香苗、泣きたい時は、素直に泣けばいいよ、私達は一緒に生きていくんだ」

香苗の胸の痛みは、癒やされて、小さな絆に変わった。

それでも、ほんの少しの切なさ、香苗の目の中に灯っていた。

勘介と抱き合ったあと香苗の心は、いつも少しだけ痛い、どうしてなのか、知りたいと思っていた。

香苗は、寂しさだと思っていた。しかし、それは違う。

勘介のすべてが知りたいのかも知れない。

肌を合わせても、すべてを分かち合うことが出来ない。

互いに、愛を捧げていても、すべてが幸せにつながるわけではない。

話をしなくても同じ方を向いて、歩くような、香苗の両親のような夫婦になるのには、まだ月日が足りない。

でも、香苗の胸のこの切なさは、決して悪いものじゃない。

勘介をもっと分かりたいと思い、もっと自分を見て欲しいと思う。そう言う気持ちの元になっていた。

二人は今はまだ、赤子のように、欲するばかりである。

小さな試練におののいて、心を痛めている。

けれど、胸の中の小さな痛みは、二人の愛がここにある証だ。

見えない愛と言う心を、意識すると、今まで腑に落ちなかった苦しさを、湧き上がるような喜びの涙が理解できた。

心が痛みを感じても、その痛みが掻き消えるほどの暖かさがいつの

間にか胸の中に湧いて来る。

そしていつも、辛さや痛みよりも、少し照れくさい幸せの記憶の方が強く残るのだ。

香苗は、険しい道のりのその先にあるのが、幸福だけではないのを知っていた。

けれども、隣に伴侶が歩む姿を見ると、勇気が湧くのだった。

遠州に住み着いてから、すでに、二月が過ぎた。

香苗は、花と手紙をやりとりし、すっかり元気を取り戻していた。

勘石は、覚悟はしていたものの、固まってしまった右手の状態の悪さに、落胆せずにはいらなかった。

包帯を外しては、また巻き戻してしまう、そんな日々が続いた。

勘石は、医者以外の人生を考えたことがない。寺子屋の先生でもするさと軽く言っていた自分が愚かに思えた。

勘石は、思い悩みながら、一つの考えに達した。

それは、ただひとりの師である篠山秀山に相談することだった。

親も無い自分が、唯一、弱みを見せられる人であった。

香苗のことを考えると、我が身がどれほど追い詰められているのか自覚できた。

今、寺子屋を手伝いこの地には、初めての医者として暮らしている。長崎への旅の途中なのだと言明すると、町の人々は一様に残念がつて、それならば、誰かに医者としてのほどこきをして欲しいと願うのだった。

香苗を医者として、一人前に育てるために、良きところとして長崎を旅の目的地としたのだ。

その考えを変える気はないが、この地の人々の望みも叶えるべきだろう。

そして、一番の問題は、我が右手が固まったままようとして動かないことだ。

香苗は、最近では、一人で患者を診るようになっていた。昼間、勘石が寺子屋で子供達の世話をしているからだ。

女先生の時は、年寄りや子供がよってくる。どこかに痛い所があることもあるが、大抵は、話をしに来るだけだ。

お婆さん達は、早く子供をつくれといった。子供が出来れば、ずっと、止まってくれと思うているのだ。

香苗は、長崎に行きたいのか、それともここに止まって、暖かい暮らしを続けたいのか、迷っている。

それが、最近の、香苗と勘石の日常だった。

勘石は、最後の患者を診終わると、今日こそ、香苗に右手の事を話そうと、寺から借りている庵に帰って来た。

そして、香苗と二人で庵の外に置いてある大きな桶に湯をためて風呂のかわりにする

香苗は、初めは外の風呂を嫌がったが、最近、襦袢をきてゆを浴びる。勘石が一緒なら、怖さは感じなかった。

少ない湯だが、浴びると体がすっきりとして気持ちよかった。

湯から上がって、夕飯の膳を囲むと、香苗は、今日診た患者の見立てについて、勘石に質問したりした。

香苗は、勘石が少し口数少ないとは思ったが、今日は風邪を引いた子供が多くて香苗も大変だったから、夫も疲れたのだろうと思っていた。

「香苗、君は、私の右手についてどう思う？気づいていたろう。感覚はあるのだが、動かせない。さすがに、ここまで悪いとは思わなかったよ」

香苗は何でもないさと言う顔で答えてくれた。

「手の筋肉は細いから、固まってしまったりとほぐすのが大変なのだ」と聞いたことがあるわ」

「温めることも、揉みほぐすことも大切だけど、やり過ぎれば、炎症を起こすことがあるって、父さまが言っていたわ」

「一月かかって固まったものは、二月かかるのが基本なのですって」
香苗が父親から聞いていたことは、勘介の手が動かない時のための対処方法だった。

カルテを見せながら、香苗に説いてくれた。家を出る、十日ほど前のことだったそうだ。

「香苗、実は、先生に相談してみようと思っていたんだ。私には、先生しか頼れる人がいないからね。けれども、先生はこうやって助けてくれた、ありがたいことだね」

「勘介さん、そんなに恩におもうことはないわ。私もあなたも、篠山の家族なんだから、家から出てよくわかったの、いつも、父さま母さまに守られているって、そして、それはあなたも同じよ」

自分の右手心配をする香苗の姿を見ると、孤独だった自分に、何かが出来た気がした。

家族が出来たと言う実感はない。けれど、心の寄りどころが確かに出来た。

本当は香苗の事を、どんな困難からも守ってやりたいと思う、けれども実際には、守らなくてはと思いつながら、彼女の優しさに守られている。

以前の勘石なら、妻に守られることに引け目を感じて、暗い気持ちになっただろう。

しかし、いまの勘石は、妻の優しさを素直に受け取って、幸せを感じる事が出来る。

勘石は、今まで、香苗を思い続けて来たことが、報われた気がして、胸が熱くなった。

「香苗、私は、お前の事を諦めなくて本当に良かったと思うよ、この手が動かないと言うのに、私は幸せを感じるんだ」

香苗も同じだった。二人でいると、暖かいのだ。心のなかの切ない気持ちも、慰められていく。

医者になりたいと言う気持ちも、この暖かい幸せのなかで、なし崩しに消えて行くのかもしれない。

香苗のなかには、今子供が出来たらしい兆候があった。

香苗は、子供が出来たらしいことがわかると、大きな勇気が湧いて来るのを感じた。

香苗にとってお腹の子供は、すでに、家族の一員で、大切な見方だった。

この子供の為に、医者になるのが遅れたとしても、香苗は、後悔はない。この頃、子供を連れて来る母親の心配そうな顔の、本当の意味を感じられるようになって来た。

そして、出てきた家の両親の大きな心も、はつきりと分かった。

「勘介さん、右手を揉んでみてもいいかしら、少しずつ柔らかくして行きましょう」

香苗は、その漁師町で子供を産んで、そこで、医者になった。手術を学ぶことは、結局は出来なかった。だから、香苗のことを名医と言う者はない。

けれど、勘石の右手は、少しずつ感覚を取り戻して、やがては、術刀を握れるまでになった。

香苗は、勘介が術刀を握れるようになることを、自分の夢としたのだ。

香苗が、夫の動かない右手を治したことは、人づてにうわさとなり、施術を受けにくる患者さんがふえた。

その為に、香苗は手術を学ぶ時間をなくしたのだ。

固まった手や足が、少しでも動く時、人は恋でも降って来たように、びっくりした顔をする。

香苗は、術刀を握って、命を守るしことから離れている。

しかし、人の喜ぶ顔を見ると、香苗は、自分のやるべきことが、これだと、確信出来た。

人の命は、心臓の鼓動だけではない。

香苗は、自分のしていることも、命を守ることだと思っている。

だから、香苗は、夢破れたとは、思っていなかった。

夫の支えとなつて、人の役に立ちたい。

ずっと願って来たことが、今、香苗と勘石の日常になっている。

そして、もうひとつの、小さな夢、ミカと名付けられた娘は、母親の傍らにいて、すやすやと眠っている。

香苗も、勘石もまだ、湯島の家には帰っていない。

しかし、きつとこの三人の顔を見せればそれでいい。

二人には、名家の、体面を守ることは出来なかった。しかし、この暖かい幸せを成すことができた。

香苗は、満足だった。胸の中にあるのは、あたたかい優しいものと、自分を支えてくれる大きな自信だった。

「ミカちゃんは、大人しくしてるな」

香苗と話すのを、楽しみにしている患者さんは多かった、ミカのこととは、皆が可愛がってくれた。

香苗は、そんな今の暮らしが好きだ。香苗がずっと求めて来た日常だった。

「香苗先生、長崎にはもう行かないのかい？」

膝の治療を受けている患者さんがそんなことを聞いた。

すると、後ろで待っている患者さんがそんなこと聞くなよと話に加わって、和やかに時が経っていく。

「長崎にはもう行かないわよ、私の人生はここにあるんだから」

香苗はにこりとして、そう答える事が出来る。

今の香苗は、夫のことも、自分のことも信じていることができた。
この土地での暮らしが、二人を強く育ててくれたのだった。

ここにあるのは、小さな幸せだ。
けれど、その幸せを感じる心が胸のなかにある。

暖かい優しいものにあう度に、香苗は、この心を植えつけてくれた
両親の顔を思い出す。

少し離れた所にある寺子屋から、夫の声が聞こえて来た。

「ミカちゃんは、父さんの声がわかるんだね」

患者さんが香苗の顔を見て微笑む。

香苗も、にこりと笑顔を見せる。

こんな時、香苗は、心の中にいる夫とともに、とても厳しくて、優しい両親の顔を思い浮かべるのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6040g/>

薬師の妻 篠山香苗 2

2010年10月9日18時09分発行